

大陸（北支）

鉛筆を倒して生き延びた軍隊

兵庫県 宮 艸 義 雄

私は大正七年七月二日、兵庫県赤穂郡狭野村で生まれ、両親のもとに九人の兄弟の長男で、元気に育ちました。弟や妹のために絶えず頑張れと自分自身にいていました。

他人に負けぬよう、何をしてもしも一生懸命でした。家が豊製造業でしたから、農家の藁の仕入れに行ったり、畳表の買入や、畳縁の仕入れなどに父親に連れられて、大阪や神戸、そして岡山から備後の方まで行ったこともありました。家の生活程度は、当時としては中くら

いの生活状態でした。

高等小学校を卒業すると同時に神戸の豊製造会社に丁稚奉公に行きました。一生懸命に腕を磨いた甲斐あって三年で一人前の職人になりました。普通の畳や神社、仏閣、一般家庭のは簡単ですが、数寄屋造りの家、特にお茶室は難しく、丸い畳はありませんが矩形なのや三角なのがありました。芦屋や西宮のお金持ちや、神戸の異人館などに日本間の離れを作ったり、花ござの特別注文等がありました。

こうして楽しい青春時代を神戸で過ごしました。中国大陸で戦争が拡大し、国家総動員令が発表されました。一寸世間が暗くなってきました。

昭和十三年七月に相生に帰って徴兵検査を受けました。ちょうど神戸を出発する時が阪神大水害の日でし

た。六甲山が下から見ていると、緑の山が、皮がめくられるように滑り落ちてきて、町の中を南の海岸線に向かって土石流となって流れて、タンズや長持がプカプカと流されて行きました。汽車はトトロと歩くように西に向かって走っていました。

徴兵検査より、その災害の方が強く印象に残っています。徴兵検査は第一乙種合格で、何カ月か経過したとき、甲種に編入という通知がありました。軍隊に入るまでは神戸で働きました。当時はお礼奉公といって徴兵検査から軍隊入隊までは無給で奉公したものです。

昭和十四年一月十日現役兵として歩兵第三十九連隊に入営しました。中国大陸で連戦連勝の時ですから、意気天を衝くような状態で見送られて入営しました。神戸を出発する一週間前まで働いていましたから、会社の皆さんにも元気で頑張れと見送られ、私は二度も歓送されました。

私は補充隊第四中隊で、部隊は歩兵が本科ですから、三カ月の間は歩兵本来の教育を受けます。歩兵銃での諸演習訓練で、その後に特業を持つことになります。

歩兵砲、重機関銃、軽機関銃、瓦斯、通信、衛生、ラッパなどとそれぞれの業種の教育を受けます。

私は四月一日に師団無線教習所に分遣を命ぜられました。城北の五十一部隊（野砲隊）に師団管下全部隊より通信隊の初年兵が集合して教育を受けるのです。

「宮艸、貴様は歩兵の代表である。他兵科に絶対負けるな」と発破をかけられて臨みました。本科教育の時は内務班にて私的制裁がありました。集合教育は厳しい訓練のみで鉄拳制裁はありませんでした。

自分は有線通信だったので通信教典のほかに屋外における電線布設が大変な苦勞でした。城北練兵場は東西千メートル、南北五〇〇メートルですが、この中を走り回ることが第一番目の訓練でした。有線の長さが一本五〇〇メートルで、有線ケーブルを胸に抱いて延線作業が大変でした。これを同時に競争で行うので、足が早くないと遅れます。遅れると「遅れたものは、今一度やれ」と怒鳴られます。

自分は早く走ることができたのでよく誉められました。裏山が広峰山といって海拔二五〇メートルぐらい

ですが、この山登り延線訓練にはあごを出しました。全員、この広峰山には恨みを持ちました。急勾配の山地に延線し、これを撤収するのが大変です。順序よく巻き納めておかないと、次の延線に手間取るので、要領よくすることが一番でした。とにかく健康で体力と走力が重要でした。

六月末に教育終了で原隊復帰を命ぜられました。この時に教官から「宮艸二等兵、成績最優秀である」といわれ、これが原隊に報告してありました。原隊復帰の申告をしましたら、隊長から「よくやった。特別に三泊四日の外泊を許す」といって家へ帰らせてくれました。家族も親戚も喜んでくれました。

原隊で歩兵教練をしていましたら、七月二十七日に田辺部隊、田崎部隊要員として出勤命令ができました。二十四時間動員で即出勤で慌しい準備です。姫路駅から万歳の声に送られて宇品港へ着き、翌日は船が出帆しました。白布を巻いた銃を抱いて、灯火管制で真っ暗な船内に一晩いたら夜が明けて「下船」という声で上陸しましたら釜山でした。

三十日に龍山歩兵第七十九連隊補充隊に到着、田崎部隊に編入されました。部隊編成で少しの間待ちました。八月五日部隊編成完了。訓練のために漢江の川原の砂原で徒歩教練で走ったり、匍匐訓練を行いました。朝鮮は大陸的気候というのか直射日光に当たると非常に暑く、焼けつくようでしたが、日陰に入るとヒンヤリして涼しいものでした。夜が一番苦手で、南京虫が多いことに悩まされました。朝起きると何十カ所も腫まれており、その痒いことは話になりません。休養は良好で主食も充分、副食には馬肉や野菜もありました。二カ月半ほど龍山にいて、十月十七日出勤命令で貨車に載せられて北支に向かって出発しました。鮮満国境(鴨緑江)を渡って十月十八日山海関を通過しました。北支の洪洞に到着したのは昭和十四年十月二十三日でした。

駐屯地には電話設備が充分できているので「宮艸、電話交換手を命ず」で約一カ年間本部の電話室に勤務しました。これは楽な業務でした。その後洪洞に一年間いましたが、あまり目覚ましい活動はなく平穏な月

日を送りました。十二月に一等兵になり、昭和十五年九月に上等兵に進級、そして十二月に兵長に進級しました。この二年間は、自分としては人様に労苦についてお話すようなことはありませんでしたが、軍人として精神面と肉体の労働のことは、一般社会人として味わうことのでき得ぬ苦勞でした。

山西省臨汾という街に部隊が移動して、これからは大きな作戦が多くありました。肅正討伐といって、今日は東に明日は西という具合で、兵営にいることなく出陣しました。一度出陣すると、一カ月も二カ月も交戦してきますから、途中で戦死したものの、戦傷を受けた戦友という具合で帰營する人数は必ず少なくなっていました。

はっきりとは記憶していませんが、それでも二〇回は出陣しました。重慶軍を捕捉撃滅したといって殊勲甲だといわれたとか、普南、郷寧、沁源、中原などなどの作戦に従軍しました。身には寸傷も負うことなく、無事ご奉公できたことを喜んでいます。

自動車隊の小松部隊が全滅したところを目撃しまし

たが悲惨なものでした。百両ほどの自動車が峠道を行進中、先頭が襲撃され、最後尾の自動車も攻撃されて、全部の自動車が動けない状態で山上から狙い撃ちされて、自動車は次から次へと火災を起こし、燃料、弾薬が破裂し、部隊も防戦していたが衆寡敵せず全滅しました。後には自動車の残骸が残っていただけでした。跡に「小松部隊全滅の地」の木柱が立っています。

敵地においての戦争ですから、地の利は充分敵側に有利で、雨霧、夜間、とくに暗闇では当方は警戒するだけ、敵は何日何時にどこから襲撃してくるか不明です。幾度となく危険な状況に遭遇しましたが無事にすみました。

今、明瞭に記憶にあるのは、師団司令部が移動してこの山の向こうにくるので、現在地からその予定地まで通信線を張れ(約一〇キロ)と命令を受け、自分の分隊一五人と隣の分隊一五人と小隊長の指揮のもとに作戦完了し、ホッと一息ついて、試通良好とのことで子孔という小さな部落で野営していましたら、蒋介石の正規軍が夜襲して来ました。小隊長は「皆隠れろ」

と命令しました。夜間、敵の数も不明な時に自分の方から攻撃したら、その位置を敵に知らせるだけです。

自分は兵隊一人と穴の中に飛び込みました。浅い空井戸のようでした。静かに送信機を操作して友軍に援軍を求めました。じーっと耳をすませば、すぐ頭の上で「リーベン・トントン・スラスラ」と日本兵全部死んだと聞いています。不思議と頭が冴え、冷静になりました。今夜は故郷の氏神様のお祭りだ（十月一日）と思っている時、小隊長が「宮艸分隊長！」と呼んでいる。腹が冷えて気持ちが悪いが、そんなことを言っている時ではない。

夜明け近くになって敵の去っていく後ろ姿が見えました。その時、小隊長は「全員突撃」を命じました。銃に着剣し、腰だめ射撃で突撃だ。「突撃」「ワー」で三〇人が横一線になって突進しました。敵は無人だと思ったのに俄かな事態で一目散に逃げて行きました。夜明けと同時に援軍が到着しました。一番苦しい戦闘でした。全員腹が冷えて下痢をしていたからです。我が方無傷で敵にはかなりの負傷者があったように思え

ました。

私は昭和十六年八月、陸軍伍長に任官し、同日付で第四十一師団（通称号・河兵团）第三五七〇部隊付を命ぜられました。

河兵团は、宇都宮、水戸、高崎の昭和十五・十六年徴集の現役と一部補充兵からなる精鋭師団でした。そして近々移動があるぞというニュースが流れました。ちょうどその時に母親から手紙が届きました。文面は弟が十六歳だが、軍人になるといつて現役志願をしたとのことです。母は自分が帰るまで待てと止めたが聴かずに軍隊に入隊したといえます。もし、二人とも靖国神社へいったら、私は何としようと、訴えています。母親の心が分からぬではないが、当時の日本男児として、当然お国のために一身を投げ出す時でした。

河兵团任地移動のニュースが伝わってきました。自分も同年八月に陸軍軍曹に任ぜられました（自分は志願もせず）。一兵卒でいいのに、なぜ下士官になるのか不思議でした。これといった勲功はもちろんです、ただ真面目一途に務めた、ただそれだけのことです。

師団司令部の同期の戦友が「貴様、召集解除になるぞ」「今少し務めぬか」「恩給が付くぞ」などと除隊延期を希望せよと進めてくれましたが、母親からの手紙の件もあるし、軍人恩給もな……と思案しました。その戦友が「鉛筆にでも聞いて見る」と一本の鉛筆を手渡ししてくれました。よし右なら帰国、左に倒れたら残留だ、と机上に鉛筆を一本立てました。手を引くと右の方にバツタリ倒れました。母親が自分を呼んだのだと決心を固めました。

昭和十七年十月十五日、山東省徳県を出発して帰国の途につきました。同月十七日山海関通過、同十九日安東通過、同二十一日釜山出発、同日門司上陸、同二十四日宇都宮着ですが、山陽本線の相生駅通過の時、わが家が目の前にあるのに、誰一人宮艸義雄がこの列車に乗っていることを知らぬのだと、窓に頬を付けて見つめると自然に目頭が熱くなりました。昭和十七年十月三十日、陸支機密第二五四号により召集解除となりました。

思い起こせば、昭和十四・十五・十六・十七年十月

まで、満三年十一月のご奉公でした。

河兵団は五カ年にわたり広漠たる黄泥の北支に奮戦し、自分の帰国後に、南方戦線に急援部隊として再出陣しました。そして武運つたなく玉碎戦闘を敢行したのですが敗戦を見るに至ったのです。思えば残念無念で、戦友各位の英霊の安らかならんことを祈ります。

帰郷後即、村役場に届け出ました。村長が「永い間、ご苦労さん」と労をねぎらってくれ「宮艸さん、今、戦意高揚の時機です。是非、在郷軍人会の中心になって働いてください」と懇願されました。自分も郷土のために働く約束しました。遊んでおられぬから播磨造船所（現・石川島播磨重工業）の工員として働きました。その当時、管轄は内務省、軍需省、大東亜省か忘れましたが、軍需産業の会社には、それぞれに健康修練所を設けて、社員、工員の体位向上を目指せよと厳重な命令がありました。

自分は戦いより帰った直後のこと、元氣一杯であるので選出されました。重機部一人、造船部一人、電気部一人と事務職幹部一人の都合四人です。一期四十五

日制で全員寮生活です。私も一步の外出もなく寮生活をしました。勿論工員から一足飛びに職員（社員）に昇格しました。途中で簡閲点呼があり、青木少佐に教官を命ぜられ、野戦仕込みの訓練を行いました。その結果「誠に優秀な教官である」と村民大多数の前で賞されました。

会社の修練生は四十五日で帰りますが、自分たち四人は絶えず寮生活でした。親が心配して結婚せよとの親戚の勧めで、昭和十八年六月十一日に軍服とモンペで結婚式を挙げました。この時だけは寮から一晩だけ外泊を許可されました。当時といえども誠に厳しい世情でした。

自分もその後、今晩は召集がくるか、今朝は召集がくるかと、奉公袋に遺書と爪・髪並びに郵便貯金通帳を入れていました。後日の判明ですが、前軍需産業の職でいて、銃後の守りに徹しているから、召集免除の手続きが取られていたようです。

妻は残念なことに二十年前に死亡しました。ずっと苦勞を掛けて、これから案をさせてやろうという時に

亡くなりました。

今後は健康に留意し不戦の誓いを子々孫々まで伝えていきたいと思えます。

第四十一師団輜重兵連隊

私の北支那戦記

岐阜県 榎坂 雪 三

大正二年六月十八日、岐阜県飛騨の国分町の農家に生まれた。二男であるが事実上は長男で家を継ぐべき立場にあった。兵隊検査では甲種合格であったが、当時は軍縮の時代でもあったのか、いわゆる「甲種くじ逃れ」で現役兵としての入営はなかった。その時の私の番号は甲種十一番で、十番までが現役の志願兵であったので私は入営しなかったのである。

昭和の初期は、飛騨の多くの若者は男女を問わず、長野県の製糸工場へ働きに行った。私も十七歳の時、長野の塩尻へ出て岡谷を通って諏訪の川岸の工場へ勤